

2025年 ミナミハラアートウォーク 田賀陽介プロフィール

1) プロフィール

経歴：

田賀陽介（タガ ヨウスケ）1964年生れ。

- ・1989年 半蔵門リストランテ・ルッフィーノ在籍、多摩美術大学卒業。
- ・1992年 イメージフォーラム在籍。
- ・1996年 ダニエル・ビュレンヌ展（展示サポート、水戸芸術館）
- ・2005年 個展「風土とリキュール」展（東京、御茶ノ水、美蔭堂）
- ・2008年 個展「風土に関わることへススメ」展（東京、御茶ノ水、美蔭堂）
- ・2022年「辺藝」展（米沢市、信夫町）
- ・2023年「辺藝」展（米沢市、スタジオ八百萬）
- ・2024年「辺藝」展（高畠町）、「愚直」展（山形市、Q1）



賞歴：

- ・1987年 朝日新聞全日本ビデオコンテスト入賞（両角美由紀共同制作）
- ・2010年 芦原義信賞（日本建築美術工芸協会／DNP 創発の杜研修センター）
- ・2016年 AACA 賞（日本建築美術工芸協会／ヤマノイエ・プロジェクト）

2) 制作活動について

太平洋戦争敗戦により米進駐軍が駐留し、その後航空自衛隊に移譲された岐阜基地（各務原）に新設された基地内病院で生まれ、基地内で小学生低学年まで幼年期を暮らしました。今ではその面影はほとんどありませんが、私が暮らした時期は、米進駐軍の使用していた施設を使用していて、日本の密集した住宅地に比べ住宅も広い通りに点々と配置され、米進駐軍が使用していた平屋形式で、白壁にペンキの塗られた窓枠、内装もフローリングといったアメリカ的なものでしたが、屋根は日本の瓦で和洋折衷的なものでした。フェンスで囲まれた基地から幼稚園や小学校に通うには基地のメインゲートをMPのチェックを経て町中に通っていました。そうしたアメリカでも日本でもない環境、基地の境界を往来する空間と環境が私の制作要素に関わっています。



幼年期に暮らした官舎の自宅の前で談笑する母と祖母（昭和39年頃）。

その後、私は美術大学に進み、卒業後、イタリア料理と出会い地域ごとの食文化の違いを知り、また都市計画から地域計画、自然環境との調和を前提にした地域づくりや緑地の計画、山道整備といった活動を行うことでより地域の文化や環境についての思考を深めてきました。より美術活動に身を置くことになったのは、山形での大学の教職を得て地域の環境や人々、とりわけ美術活動をする若い美術家、美術関係者と関わるようになってきたことが大きな要因であるとも考えています。

境界、地域の環境、人々の暮らし、食材、道具、が私の制作活動の根底に流れている要素だと考えていますが、それは私だけの個人的な制作の要素というだけでなく、制作から生まれた作品を通じて出会う人々と共有する文脈を探る大きな手がかりだとも考えているところです。

3) 今回の展示について

私はこれまで行ってきた緑地計画や山道整備の活動で粗朶柵（樹木の枝を束ねて境界や土留のための柵）をつくってきました。柵は完全に隔離されたコンクリートのような壁ではなく、跨げば通れるようなものです。直進する目的がなければ、またぐ面倒を考慮するとゆらゆらと迂回する。仕事のように目的化されていない日常では、それは自分が生み出したものなのか、他者が生み出したものなのかに関係なく、知らず知らずのうちにこうした境界あるいは結界がつくられていたりします。

それは人間関係だったり、行動範囲だったり様々な結界で視覚的に感じないものだったりする。直接言葉にすれば大きな亀裂や断絶につながってしまうものが絵画やオブジェとして表現することで緩やかにつながりにも見えてくることを期待したりしています。

また製作中の間に私の制作現場に近所の方が立ち寄って声をかけてくれたり、家庭菜園でできた農作物を持ってきてくれたり、自ら山に上がり画材の材料を採取したりする日常があります。その中で印象に留めたいもの（それは農作物だったり、素材や道具に染まるインクだったり）を形に留めることも、制作と日常を繋ぐ私にとって重要な作業です。今回はそうした作業の一部も、境界、結界をテーマとともにご覧いただければと思っています。